



1 万年後、1 億年後の地球はどのようなになっているだろうか。私は常々このように考える。

その時もまだヒト種が存在し、環境に配慮した生活を送り、持続的な開発を行っているのだろうか。それとも、ヒト種は存在しておらず、新たな種が地上を闊歩しているのだろうか。

そのような未来に、私は当然存在していない。そして私を 1 個の生命体と捉えるならば、私と未来は時間的にも物理的にも大きな隔たりがある。しかし、私の存在を、部分として、全体として広げて行けば、徐々に接点も増えていく。それはつまり、1 個の人間としてのみならず、ヒトという種として、地球系生命体として捉えるということだ。それならば、私は 1 万年後、そして 1 億年後とも繋がっている。

しかしながら、人類即ちヒト種を全体と捉える従来の生命観では、未来と私を一つの存在として包み込むことは難しい。

そこで私は、「導命（どうめい）」という名の新たな生命観を提唱する。

導命は、私 1 人の世界観や物語に留まるだけでなく、21 世紀以降の世界に大きな影響を与えると私は確信している。最初の試みとして、私の次の台詞に触れていただこう。

「アームストロング船長の小さな一歩は、人類にとっても、そして地球系生命体にとっても偉大な飛躍である。」

本書を読み終えた後、もう一度この台詞に触れてほしい。

あなたは感動と共に納得するだろう。

根源生命

万物の大本は根源生命である。根源生命は多次元生命、宇宙生命、DNA生命、魂命など諸々の生命体を包含する。

さらに、次元、時間、空間、法則、物質、力など、世界を構成する諸要素を生み、森羅万象を形作る。

全ては、根源生命の現れ。

宇宙、銀河、太陽、地球、山脈、高層ビル、茶碗、ノート、温度計。

あなたは、根源生命の現れ。

あなたの肉体を構成している素粒子、あなたの素粒子を素粒子たらしめている法則、あなたの肉体が存在する空間、あなたの人生に変化を与える時間、あなたの人生を充実させる力。

全ての現象は、根源生命の生体活動。

宇宙の生成、銀河の衝突と融合、ホモサピエンスの戦争、生と死、出会いと別れ。

多次元生命と宇宙

根源生命が内包する各次元生命体のうちの、4次元時空生命体が宇宙。

私たちに意識があるように、多次元生命体と宇宙にも識がある。

多次元生命識と宇宙識、そして我々の意識。

我々の意識は、宇宙識の一部を構成している。

意識は脳細胞の発する電気信号の統合体。

つまり、意識は宇宙識にとって、幾億ある電気信号の一つ。

我々の身体も同様。宇宙生命を構成する細胞の一粒。

我らの生き死に、それは、宇宙の呼吸がもたらす、宇宙細胞の一瞬の明滅。

意識と身体感覚を地球全体にまで広げれば、地球と一つになる。

銀河系全体にまで広げれば、銀河系と一つになる。

宇宙全体にまで広げれば、宇宙と一つになる。

多次元生命体にまで広げれば、多次元生命体と一つになる。

根源生命にまで広げれば、根源生命と一つになる。

御魂人（みたまびと）

私たちの本体は、魂次元世界に住む御魂人である。その御魂人は、今生への入り口である「生の門」をくぐり、その際に、ホモサピエンスの肉体をまとい、名を授かった。我々は、御魂人が今生で演じている登場人物なのだ。

舞台役者が衣装をまとうように、御魂人はあなたという肉体をまとっている。舞台役者が役名をもらうように、御魂人はあなたという名を授かった。舞台役者が舞台上で演じるように、御魂人は宇宙という大舞台上で演じている。現在の私たちは地球編を生きており、小さな惑星を舞台として、あなたという登場人物を一生懸命に演じているのだ。いわば、人生とは芸術であり、あなたの生涯は、死を以て完成する一つの作品である。

役を終えるか、肉体の寿命が尽きるか、あるいは別の事情によって死の門をくぐるときに、ホモサピエンスの肉体を脱ぎ、名を残し、役割を終え、魂界へ帰っていく。生の門は、魂界からの出口、今生への入り口。死の門は今生からの出口、魂界への入り口。御魂人にとって、生死の門にそれほど差はない。ただ、方向が違うだけにすぎない。

人間としての自我と、御魂人としての自我は異なる。例えば、演じている役者の自我と、登場人物としての自我の違いを考えてみればよい。ヒトとしての自我は、御魂人の自我に包含される。その御魂人は、別の登場人物として今生に現れることもあり、その際に、過去の精神、覇気を継承することがある。

D N A

我々のDNA、すなわち地球系DNAは高度な知性を持つ存在によって設計された。ヒトの脳神経と宇宙の図が似ているのは、宇宙と同じ生成原理に従ってDNAを作成しているからである。地球系DNAの機能や役割は次の4つに大別される。

- 1 設計図
- 2 遺伝情報を記録する
- 3 生命識から遺伝情報を受信する
- 4 遺伝情報を生命識に送信する

殆どの生命情報は、DNAに記録されているのではなく、地球系DNAの生命識に集積される。DNAは自身に記録された情報と、生命識から取り寄せた情報を組み合わせて生物を作り上げる。

DNAそのものは地球だけに限らず、銀河などに広く分布している。

我々のような天体系DNAは、其々の惑星で独自の情報を蓄積しながら拡大している。そして、いずれは融合し、宇宙にまたがる巨大なDNAネットワークを構築する。

総命（そうみょう）

地球系DNAに反応する光線を、地球に向けて照射してみる。

深海の微生物から国際宇宙ステーションの乗員までを含む、一つの巨大な生命体が見えるだろう。

これが、地球系DNAの本来の姿なのだ。この生命体を「総命」と呼ぶ。

総命は根源生命、宇宙生命の構成要素であり、総命独自の識である「総命識」を持つ。

総命の全体像は、地球周辺に限定されない、地球系DNAの分布する範囲全てが総命である。

火星までなら火星を含めた範囲が、太陽系なら太陽系が総命の全体である。

地球のような惑星系DNAは、それぞれが、それぞれの速度で成長している。

総命を球根に例えるなら、ちょうど出芽に差し掛かったところである。

今後、総命はさらに成長し、地球の花を咲かせる。

やがては花粉を飛ばし、他の惑星系DNAと融合し、新たな系統の花を咲かせるのだ。

種器官

人体が様々な臓器や器官で構成されているように、総命もまた、様々な要素によって成立している。

この場合、臓器等に相当するものが、類や種などの生物である。

これらは、それぞれの特徴に基づいて、総命内での役割を担っている。

ヒト種もまた、器官である。これをヒト種器官と呼ぶ。

ヒト種器官は総命の一部分だが、それ自体が一つの生命体でもある。

ゆえに臓器などを有する。

民族、国家、政治結社、宗教共同体、企業などヒトによって形成された組織や集団がそれに相当する。

ヒト種器官は、インターネットの出現によって新たな神経網が張り巡らされ、ヒト種器官内の情報伝達は広範かつ緊密となった。そしてヒト細胞は、大規模な情報を同時期に共有することが可能となった。さらに、日々生み出される幾億の情報を、脳的組織が統括することで、以前に比べてより一層、一つの生命体として機能するようになった。新たな生体機構を獲得したヒト種器官は、今もなお進化を続けている。

ヒト細胞

人間は、ヒト種器官を構成する細胞である。宇宙の中心でも地球の支配者でもない。

ヒト種器官は、それ自体が一つの生命体でもある。よって脳や心臓に相当する部位が存在する。それらの部位は、脳的細胞、心臓的細胞といった各種人間によって構成されている。

脳的人間は、ルールを定め、物事を大局的に判断する。政治家などの指導者がそれに相当する。

白血球的人間は、異物に対して戦闘的に対応する。軍人や警察などがそれに相当する。

生産的な細胞、例えば造血細胞やミトコンドリア的な人間は、金銭や物を作り出す。商人、農民、職人がそれに相当する。

脳が大量のカロリーを消費するように、脳的人間は各種人間の中で、もっともエネルギーを消費する。そのため、脳的人間に人材、富、情報、物が集中する。脳的組織ともなれば、その傾向はより一層強まる。これは生物学的必然、生命の掟、宇宙の法則である。

脳的人間として活動する際は、全体的な視点と包括的な判断基準が求められる。それは例えば、ヒト種器官に貢献しているだけでなく、総命の成長に寄与しているか否かも同時に考えることだ。

この世には、ヒトやヒト種器官にとっては有害でも、総命の成長にとっては有益と言える行為も存在するのだから。

総命の体内

ヒトは、総命という巨大な生命を構成する細胞或いは微生物である。巨大な生命と言っても人間の視点での話であり、宇宙や銀河から見れば、総命も微生物といえる。

地球系生命体の微生物である我々は、当然、その体内に棲息している。ヒトが当たり前に眺めている山川草木海空の豊かな自然風景は、体内そのもの。これは、都市にも当てはまる。ニューヨークの高層ビル群も、ローマの街並みも、何もかもが体内の姿である。

DNAの被造物であるヒトは高層ビルを建てる。これ、人工物なり。

DNAの被造物である燕は巣を作る。これ、燕工物なり。

総命にとってみれば、ヒトの建てたビルも燕の作った巣も、被造物の被造物なり。

あなたの視点は、ヒト細胞のミクロの視点なり。

ヒトの役割

地球系DNAの被造物は、原生生物から一貫して進化を続け、現在のヒト種、つまり従来型ヒト種に到った。そして進化は、常に地球外へ向かっている。

ここに、ヒト種器官としての役割がある。それは、生存圏を地球外にまで拡大することである。DNAが拡大する方向は地球外であり、ヒト種だけが有するこの能力は生命の流れと一致している。これはすなわち、総命内におけるヒト種器官の果たすべき役割を意味している。

ではヒト種器官の具体的な役割とは何か。それは、地球外でも繁殖可能な環境を作り上げること、すなわち地球外共同体の建設である。地球外共同体とは、その地で暮らす住民が結婚、妊娠、出産し、生まれた子らがそこを故郷として成長し、学び、恋愛し、新たな家庭を築き、子を儲け、教育し、その子がまた同じく成長できる環境を指す。それらの条件を満たすために、政府、自治体、企業、学校、病院、公園、商店街、競技場、歓楽街等が設けられており、地球外の独立した文明圏としての役割を果たしている。

この共同体の存在意義は、DNAの拡大に寄与するだけではない。生存リスクの分散にも貢献する。地球で大規模な災害や人災、例えば大噴火、大地震、地球規模で蔓延する疫病、そして全面核戦争が発生し、地球人の文明が壊滅しても、共同体の人々は文明を保持している。さらには地球のヒト種が地球のみならず宇宙から消滅しても、あるいは地球が木っ端微塵に碎け散り文字通り滅亡しても、地球外共同体が存在しているので総命は生き続けることができる。

進化とは成長

大部分の生物が成長するときは、まず細胞や組織が変化する。
ここで、細胞と組織だけに着目すれば、それは進化と呼べる。
しかし、全体の視点から眺めれば、それは生物の成長なのである。
個体で見れば変化、部分で見れば進化、そして全体で眺めれば成長。
一個にして部分にして全体である。

ヒトの進化もこれと同じである。
ヒト種器官だけに着目すればヒト細胞の変化は進化と呼べるが、
全体の視点で変化を眺めれば、ヒトの進化とは総命の成長なのである。
総命にとってのヒトの進化は、40億年続けてきた成長の一過程に過ぎない。
そして今は、ちょうど出芽に差し掛かった段階である。

ヒトの進化の最先端は、宇宙飛行士を筆頭とした宇宙開発関係者たちである。ただし、まだ完全には進化に到っていない。今後彼らが進化を明確に意識するようになれば、彼らの脳とヒトゲノムに変化が生じる。やがて彼らの血統は総命の新芽となって成長し、総命は萌芽の段階へと到る。それによって、ヒト種器官と総命は、本格的な進化、そして成長の段階へ進む。

二重螺旋のたすき

DNAとは二重螺旋のたすきである。40億年前に第一走者がスタートして以来、数多くの走者が後世にたすきを伝えるべく走り続け、現在の走者である従来型ヒト種にそれは繋がった。次は、ヒト種が未来へたすきを繋げる番である。

ヒト種以降のコースは地球外が主要な舞台となり、これまでとは異なった環境となる。海では海の環境に適した走者が、陸では陸の環境に適した走者が走ったように、地球外では地球外の環境に適した走者が担当するべきである。ゆえにヒト種の次の走者は地球外での生活に特化した新たな種となり、ヒト種の役割は新たな種を生み出すことになる。

新たな天体に移住する種はヒトでなくともよい。むしろ地球外への移民を目的とした新たな種を生み出し、彼らに宇宙の開拓を任せるべきではなかろうか。ヒト種は地球での生活に特化し過ぎているため、やはり地球で生を得て死を迎えることが自然の理となる。今後はヒト種に拘ることなく、総命という全体的な視点に基づいてDNAの存続を検討すれば、自ずと道は開けてくるだろう。

ヒトの夕暮れと新種の夜明け

現在の地球系生物は、地球以外に住むところはなく、この小さな天体と一蓮托生の運命にある。だがいずれは、地球系生物によって地球外共同体という新たな生存環境が建設され、地球から完全に独立した文明圏が誕生するのだ。まさに生命の飛翔である。

この力強い羽ばたきは、決して従来型ヒト種のみによって成されるのではない。むしろ、ヒト種の次に誕生する、より優れた種族が、その大役を担うのである。地球外へ向かう一連の過程において、従来型ヒト種から新型ヒト種が生まれるのだ。そして新型ヒト種から、新たな種の「新種人」が誕生する。彼らの登場により、従来型ヒト種、つまり現在の我々は殆どが無力となる。では、彼らの特徴とはどのようなものだろうか。

「新型ヒト種。新しいヒト」

彼らは放射線への耐性が従来のヒト種よりも強い。特に胎児期～幼少期にかけて顕著に差が出る。DNAの修復能力と耐久力が格段に高いのである。大脳が従来型ヒト種よりもはるかに発達している。抽象的な思考、直感、数学力、論理構成力、情報処理能力などは、従来型ヒト種を凌駕する。より精緻に、より大局的に、より果断にヒトや生命の歴史を把握し、独自の解釈を下す。

「新しい種。新種人」

放射線への耐性、大脳の発達新しいヒトをはるかに凌駕する。従来の5覚、つまり視覚聴覚嗅覚味覚触覚に加えて、第6覚を獲得している。その6覚は、従来型ヒト種や新型ヒト種の脳では捉えられなかった霊妙なる存在や現象を、当たり前存在として把握する。

新種人は、従来型ヒト種からは「超人」または「神人」などと呼ばれ、畏敬の対象となるだろう。

今後、総命が成長する主な舞台は地球外へ移る。その時、ホモサピエンスの役割は終わる。まさに、夕暮れを迎えるのだ。やがて夜が到来し、朝の来ない眠りにつく。そして、新しい種が夜明けを迎える。

医療技術や生命科学の発展により、選択的受精が行われ、ジーンリッチやデザイナーズベビーが誕生する。それと同時に、人工子宮または代替子宮が開発される。ティッシュエンジニアリングに代表される医療技術の進歩、ゲノム研究そして脳波を用いた電子機器の利用によってゲノムと脳が変化する。

ヒトゲノムの変化は先進国から始まる。富裕層の血統、有力な一族の血統、進化を渴望する人々の血統、宇宙開発関係者の血統、遺伝子の淘汰を勝ち抜いた集団の血統、生命の存続に危機を覚える集団の血統、宇宙進出と進化にロマンを感じる集団の血統、そして導命家の血統は新たなヒト種の母体となる。これ以降、新しいヒト種は新人、そして従来型ヒト種は旧人と呼ばれるようになる。

旧人が担ってきた知的産業や知的労働は新人が担うようになる。知識と富と権力は脳的細胞である新人に集まる。金融、行政、政治、軍事、芸術などで世代交代ならぬ遺伝子交代が実現する。旧秩序では栄華と権力を誇っていても、新人を生み出せない旧人の国家、民族などは科学力、軍事力、文化力、創造力などで新人の集団に劣るため、新秩序では劣勢に立たされ衰亡する。

新人と旧人では能力差が大きいため、共生は不可能となる。これを解消するために、自治体の棲み分けが行われる。新人と旧人の間では、遺伝子の交流は殆どない。それに伴って遺伝子の棲み分けも常態化する。やがて社会は新人の共同体と旧人の共同体に二極化される。それぞれの共同体は、独自の倫理、価値観、道徳によって統治される。

新人は、地球よりも地球外での生活を求める。この傾向は総命がそのために生み出したので当然である。先進国の工業や産業は宇宙開発を中心に構成されている。宇宙開発は新人を主体として行われる。宇宙医学と工学の進歩によって、地球外居住地での妊娠、出産、育児が可能となる。これによって新人の間に地球外と地球での棲み分けが生じる。やがて地球外共同体が誕生。その地で新種人が生まれる。

新種人にとっての人間とは、新旧を含めたヒト種を指すため、ヒト種の次の種である彼らは、自らを人間とは見做さない。人間たちも新種人を人間とは考えない。人間は新種人を「超人」と呼ぶ。概念としての超人ではなく、生物としての超人である。

しかし、新種人は、自らを超人とは考えない。自分たちが特に優れているとは思わないからだ。ヒト種自体があまりにも幼く未熟なので、それを超えたとしても、優れた種族の証明にはならないのだ。例えば亀より速く走れるからといって、その人が速いとは必ずしも言えないように。

新種人は、地球からも人間からも独立した共同体を建設する。彼らは地球周辺を支配し、地球人を管理する。その後、新種人たちの主な舞台は太陽系に移る。地球はかつての役割を終え、母なる故郷として大切にされる。進化の主役であった旧人も役割を終え、終焉の夕暮れに黄昏る。

新種人たちは居住型探査船を建造し、新種人の中でも特に優れた人々を集めて編成し、太陽系外の探査に取り掛かる。探査を進める過程で、新種人の次なる種が生まれる。

導命と導命家

総命を導くこと、これを導命という。

その為に自分の意識と身体を進化させる者を導命家という。

導命家の目的は生命を導くこと、進化はそのための手段である。

根源力、宇宙の諸力、生命の力を土台として、主体的、意志的な進化に邁進するのだ。

従来は進化は自然に任せていたが、ヒト以降の種に関しては意志的に行うのである。

受け身の進化は過去の話である。ヒトの肉体は、総命の成長を幽閉する牢獄ではない。

ヒトゲノムは成長を抑留する二重螺旋の鉄格子ではない。

ヒトゲノムは、成長の喜びを次代に伝えるタスキである。

導命家は、ホモサピエンスの旧態然とした生命観から総命を解放せねばならない。

導命家になる者は次のような人たちだ。

肉体を纏った御魂が自分の本体であると知っている者。

何らかの役割があると知っているがその役割が何なのかを探し求めている者。

充溢への渴望と情熱はあるがそれらをぶつける対象がわからない者。

御魂の光明を失った者。

表面上の快楽、付き合い、日々の満足に倦んだ者。

自らを御魂人であると認識しながらもそれに徹しきれない者。

生命の存続に危機を覚える者。

宇宙進出と進化にロマンを感じる者。

ホモサピエンスを超えようと渴望する者。

これらの人々は、導命家としての十分な精神的資質を有している。

全てのヒトが導命家としての生き方を選ぶわけではないが、

彼らの中から導命家が生まれる事を私は確信している。

では、導命家として生きるとは何か。

それは導命という世界観、あるいは物語の中で、あなた自身を晴々と演じることだ。

あなたは、御魂人が今生で演じている登場人物なのだから。

なにせうぞ くすんで 一期は夢よ ただ狂え 『閑吟集』

この世をば どりゃお暇に せん香の 煙とともに 灰左様なら 「十返舎一九」

おもしろき こともなき世を おもしろく 「高杉晋作」

宇宙という大舞台で、分別くさい顔して演じたい者は分別くさい顔して演じればよい。

小さく演じたい者は小さく演じればよい。

大きく演じたい者は大きく演じればよい。

面白おかしく演じたい者は面白おかしく演じればよい。

恒星の如く燃え上がるような演技をしたい者は恒星の如く燃え上がるように演じればよい。

あなたが導命家として生きるならば、私は導命の種をあなたに渡そう。

あなたが、私の言葉に意義と価値と光明を見出すならば、己の意志と決意で種の内部を満たしてほしい。

あなたの心は、二重螺旋の産声を耳にするだろう。その種を精神の土壌に播くのだ。

導命家の内なる光明がそれを照らす。導命の種は芽を出し、一本の逞しい樹木へと成長する。

そして木々は集まり、導命のもりを形作る。

もりは豊かな生命を育む。

進化に到る者が、そこから現れる。

人間食物連鎖

ヒトは食物連鎖の頂点に君臨しているが、ヒト種の中にも厳然たる食物連鎖があり、喰らう者と喰われる者が存在する。

強いヒトは弱いヒトを喰らい、強い企業は弱い企業を喰らい、強い国家は弱い国家を喰らう。

生命の掟に善もなく悪もなく、ただひたすらに自然である。

自分を狙う力にはそれ以上の力で応じなければ勝てず、相手を狙うには相手以上の力が必要となる。

暴力然り、経済力然り、軍事力然りである。

喰いたければ、強くあれ。

喰われたくなければ、強くあれ。

種の恐竜

2050年ごろには、ホモサピエンスの数が90億を超えていると言われている。資源問題や環境への負荷はどうなるのか、大変気にかかるものだ。

ここまで増えると、もはやヒト種器官ではなく、「種の恐竜」と言えるだろう。地球上を余すところなく闊歩し、ひとたび咆哮すれば天は震え、地は割れる。雄大である。勇ましい姿を想起する反面、本家の恐竜の結末もそれに続く。恐竜の場合は隕石の衝突による環境変化に、その巨大さゆえに適応できず、滅んでしまったと言われている。その後は、哺乳類が栄え、今のヒト種に至っている。そのヒト種がいまは、種の恐竜としてわが世の春を謳歌しているわけだが、何らかのきっかけで環境の変化が起こり、その巨大さゆえに滅亡するのか。

他の生物はヒトをどう見ているのだろうか。ヒトは捕食者であるが、これは問題ない。他の生物も捕食して生きているわけだから、ヒトだけがそれを許されぬというのは、生命の理に反する。ただ、ヒトの場合は限度を知らぬ。そして生存環境を自ら破壊し、その結果に苦しんでいる。さらに自種を破壊するに足る核兵器を大量に保有し、互いに向けあっている。これは、他の種にとって最も不可解な点であろう。個体数は激増し、勢力はますます盛んである。このまま自分たちはおろか、地球までをも食い尽くすかもしれない。

滅びゆく恐竜を尻目に哺乳類が繁栄した如く、我々の中から新しい種族が誕生し、ホモサピエンスの断末魔を聞きながら、新たな文明を築き上げるのだろうか。

自浄作用

以前なら過酷な自然環境、未熟な医療、絶え間ない戦争、疫病の蔓延、乳幼児の高死亡率などによって人口増加は緩やかであった。科学力も地球や生態系に与える影響は微々たるもの。しかし現在、かつて人口抑制の役割を担っていた要素は、以前ほど脅威にはならない。もはや、ヒト種を抑える術は残されていないように見えるが、果たしてそうであろうか。

ヒト種が一線を越えれば、総命はヒトを異物、悪性ウイルスと見做す。その時、総命の自浄作用と免疫機能が働き、「駆除」を実行するであろう。それは、核兵器の使用による種個体と建築物の大量破壊、そして放射線障害による生殖能力の著しい低下、そしてヒト種だけに感染する殺人ウイルスや細菌の猛威となって現れる。解りやすい例で言えば、全面核戦争と核施設の崩壊がそれである。これによって現存の個体数は減り、出産による増加数は著しく低下する。

仮にそうなった場合、従来型のヒトに代わって、放射線に強い新しい人々が主体となって文明を復興させ、宇宙を目指すであろう。恐竜の後、哺乳類が繁栄したように。従来型のヒトも、自分たちでは地球およびヒトを治められないことをようやく悟って、新しいヒトに地球の統治を委任するだろう。

しかしながら、これは否定的なシナリオである。大量の生物が死滅する事態を、我々地球系生命体は40億年の歴史の中で何度も経験し、その辛さはDNAに刻まれている。もう結構だ。その様な惨劇を自ら招くほど、我々ホモサピエンスは知恵無しではない。

自浄作用の一線を知るにはどうすればいいか。明確な基準はないが、参考にすべきことはある。それは、ストレスである。人体でも、細胞がストレスを感じ、それを発信することがある。総命を構成するヒト細胞が、地球の現状にストレスを感じているということは、総命もまたストレスを感じている可能性がある。あるいは総命自身のストレスが我々に伝わっている可能性もある。導命家は、自身のストレスのみならず、総命のストレスにも思い至ることが求められる。

総命のストレスは、惑星に充満している澱みや圧力を、地球外に解き放つことで軽減できるだろう。そのためには、宇宙開発に全力を注ぐことが最優先される。宇宙開発に従事する導命家は、会社の利益や国威発揚という次元だけではなく、総命の視点と生命の歴史も意識することが求められる。

資源とは生命体にとっての養分である。いまは地球のみから補給し、それで賄っているが、やがては危機に直面するであろう。こうした事態をなるべく遅らせるため、21世紀になってから、持続的な開発という概念が人口に膾炙し始めた。地球という一つの惑星の中だけで資源をやり繰りするこの考えは、数十年単位のような比較的短期間では効果を上げるだろうが、100年、あるいは1000年単位ともなると心もとなく、1万年では完全に無力である。

1万年後の世界に実感を抱くことは難しいかもしれないが、100年後、200年後ならばごく身近に感じる時間だ。子孫の事を考えるならば、地球外での資源獲得を視野に入れた開発理念が必要となる。理念を生み出すための一助として、現実的な認識空間を地球外にまで拡大することは有効である。例えば、何処かの小惑星で採掘され、地球に輸送された資源が工場で加工され、商品や道具となって日常で使用されている場面を想像してみるのだ。その場面に強い現実感や臨場感を伴えばさらに良い。導命家にとっては当たり前の世界となるだろう。

理念の創出は、資源に余裕があるうちに着手することが大切である。追い詰められた挙句に実行しても、場当たりの対応に陥りやすい。大局的に事態を把握できる新しいヒトが主導権を握っていれば幾分ましだが、従来型ヒト種が全権を掌握しているとき、資源の枯渇という事態に遭遇すれば、もはや絶望的な混沌に見舞われるだけだ。資源の欠乏に喘ぐ子孫から、21世紀初頭の地球人はなぜもっと早く資源対策に取り組まなかったのか、と非難されるだろう。

地球の美

地球外で生まれ育った新種人は、地球そのものを一つの芸術作品と考える。また、例えば友禅やオペラは、日本人、欧州人という「地球人」の生み出した「地球の芸術」、そして日本の美、欧州の美を「地球の美」と呼ぶ。

失われてしまった芸術作品や技術を惜しいと思ったことはあるだろう。地球外に住む我々の子孫に同じ思いをさせてはならない。21世紀の地球人が、自分たちの都合によって、自然環境、伝統技術、美意識を破壊し、捨て去ってしまうことは許されない。

導命家は、地球外共同体で生活する新種人に向けて、地球の美を伝えなければならない。21世紀や22世紀の地球人だけを相手にするのではなく、遠い将来、地球外共同体で生活する地球を知らない未来人も朋友と見做す、そういった視点と認識を持つことだ。

世界遺産は地球人だけのものではない。

戦争という生理現象

知的水準の高い細胞が集まり何らかの情報交換をしている。細胞がそれぞれの所属する組織に戻った後は、それぞれの結合をより強くした。それまで強力だった部位はさらに強化され、貧弱だった組織は排除された。

別の動きも見える。古く、修復に手間取っている組織の細胞の中に、精神活動の活発な細胞が誕生した。その周囲に、同じ波長の細胞が集まって、新たな組織を組織内に作り出した。古い組織は免疫反応を起こして排除に乗り出している。攻撃型の細胞が新しい細胞を次々と殺している。しかし新しい組織は強力だ。古い細胞膜や神経網や免疫系統を破壊し、古い細胞を殺している。新しい組織は強大化している。彼らの勢力に、古い細胞も加わっているようだ。

形勢は逆転した。新しい組織が支配的な形質や神経網や免疫系統を獲得し、古い細胞を排除している。あるいは古い細胞のDNAを書き換えて新しい組織に順応させている。

この動きはヒト種器官全体に影響を及ぼすようだ。他の組織にも同様の反応が発生している。

創造と破壊と成長

ヒマラヤ山脈は、インド大陸がユーラシア大陸と衝突した時に生まれた。衝突だけを見れば大規模な破壊だが、山脈の形成に視点を変えれば巨大な創造でもある。ある種の破壊は、ただ壊れる、壊すのみでなく、創造も司っている。

ヒト種器官内での創造と破壊に関する出来事と言えば、戦争であろう。古く支配的な細胞や組織が破壊され、新たな細胞や組織が支配権を確立する。地域は統廃合が行われ、技術革新が進む。

更に思いを巡らせば、アポトーシスに行き当たる。プログラムされた細胞死である。これを戦争に当てはめれば、自殺に等しい無謀な戦い、であろう。例えば、長篠の戦に於ける武田軍がそれである。

滅びゆく勢力に焦点を当てれば悲劇だが、ヒト種器官または総命という全体的な視点から眺めれば、アポトーシス的戦争は、新たな形質を獲得するための創造的行為であり、生命体の成長と言える。

多元生命体

民族、国家、企業、思想集団などの、ヒトによって形成された組織や集団は、一つの生命体である。例えば民族は民族次元生命体、国家は国家次元生命体、そして企業は企業次元生命体である。ヒトの社会は、これら次元生命体の重層的、複合的な組み合わせによって豊かな生命活動を営んでいる。ヒトは何らかの次元生命体に属しており、例えば会社員なら、国家次元生命体の細胞であると同時に企業次元生命体の細胞でもある。このように、肉体の生命のみならず、自分が所属する次元生命体もまた、その人にとっての生命である。

軍人、警察、消防、そして防災関連に従事する人が、己の職務を遂行する過程で命を落としたとしても、その尊い犠牲によって国や地域が生き延びたならば、肉体次元としてではなく、国家次元、地域次元生命体として生き続けているのである。殉職者のための慰霊祭は、彼らがそれぞれの次元生命体として生き続けていることを確認するための行為なのである。

精神的な事柄や概念もまた、一つの生命体である。思想や名誉などがそれに該当する。一例として「名」を挙げよう。「名」という生命体である。戦国武将の辞世の句には、名を生かすという思想が刻まれている。

浮世をば 今こそ渡れ武士の 名を高松の 苔に残して 「清水宗治」

名のために 棄つる命は惜しからじ 遂に止まらぬ 浮世と思えば 「平塚為広」

五月雨は 露か涙か不如帰 我が名を上げよ 雲の上まで 「足利義輝」

夏の夜の 夢路はかなき後の名を 雲井にあげよ 山ほととぎす 「柴田勝家」

これらの句が生まれるのも、「名」を己の生命と見做しているからこそである。戦国武将の意識には、肉体の生命と名の生命が常に存在していたのだ。肉体の生命以上の存在に、生命としての価値を見出す者にとって、自分の命は手段といえる。

日本もまた生命体である。縄文時代から現在に至るまで、様々な統治機構、すなわち生体機構を辿ってきた。その中で最も巨大な生体機構の変化は明治維新である。西南戦争というアポトーシスの戦争を経て、中央集権国家に到達した。第二次世界大戦の敗戦後はGHQによって生体機構を組み替えられ、日本国という名の共同体に至った。今後は、新たな環境に適応した生体機構を獲得するであろう。それはすなわち、日本という生命体の進化である。

導命分析

各種生命体を分析する際は、次の項目を用いて行う。

魂、遺伝子、首脳、身体、生存圏、環境。これを六基という。

脅威、補給、防衛、武器、情報、技術。これを六素という。

国家と企業を例にとって六基と六素を説明する。

「六基」

国家

魂とは建国理念。

遺伝子とは国民の道徳、憲法、法律。

首脳とは政府。

身体とは領土、領民、国家資産、産業。

生存圏とは隣国、敵国、友好国、国際機構。

環境とは海洋国家や大陸国家などの地理条件、自然災害。

企業

魂とは設立理念。

遺伝子とは定款、組織構造。

首脳とは執行部、大株主。

身体とは会社、保有している資産、役職員。

生存圏とは企業の業種。

環境とは寒冷地帯、温暖地帯、自然災害。

「六素」

国家

脅威とは敵国、反政府集団。

補給とは外貨の獲得、資源の輸入、人口の調整。

防衛とは軍隊、防諜、国民教育。

武器とは軍隊、主要産業、教育水準の高さ。

情報とは通信、諜報、マスメディア、民間交流。

技術とは主要製品の製造力、工業力。

企業

脅威とは競合他社、情報漏洩、大規模な天災。

補給とは経営資金、リクルート、安定した仕入れ。

防衛とはメディア対策、工場の耐震強化、社員教育、情報管理。

武器とは主要製品、研究所、企業ブランド。

情報とは競合他社の新製品、政治の動向、顧客層の動向。

技術とは主力製品の製造力、新たな製品の開発力。

六基について。

魂である国家理念と身体である国民が不一致ならば、その国は根本的な統合を失い、政府と民衆が常に対立関係となる。企業も同様である。その様な生命体は、統治力が少しでも弱まれば、内外からの揺さぶりによって容易に瓦解する。それとは逆に、魂と身体が一致していれば、少々の事では揺らがない。危機に際しては、より一層結束を強める。

各次元生命体の指導者は、その魂を具現化した存在であるべし。

指導者を選ぶ者は、己の属する生命体の魂を誰よりも愛すべし。

無魂の人々からは無魂の指導者が、有魂の人々からは有魂の指導者が生まれる。

六素について。

恒久的戦国時代を生き抜くうえで、六素は一つたりとも欠けてはならない。

斉藤道三、織田信長、そして黒田官兵衛にとってみれば、六素は常識中の常識である。

特に情報と補給の重要性は、人体にとっての水と血液に等しい。

情報と補給を軽視する個人や集団は、その時点ですでに死亡していると見做してよい。

何故なら、彼らは必ず敗北するからだ。

導雲の本体は、魂界の御魂人として存在している。本体の一部分が、生の門をくぐり、肉体をまとい、名を授かり、今生での導雲という登場人物として、己の役割に邁進しているのである。

私はいずれ死の門をくぐり、今生を立ち去るが、もう一度か二度、今生に現れるつもりである。その時も肉体をまとうのだが、ホモサピエンスの肉体はもういい。二度もまとう気はない。再び登場した際には、進化した種の肉体がよい。その肉体は脳が発達しているだろうから、ホモサピエンスの時では知覚できなかった諸々の出来事や現象に触れることが出来る。そしてその分だけ御魂人としても成長できる。やはり脳の進化こそが全てだ。意識の深度は脳機能に依るため、脳が進化すれば意識も進化する。意識が脳の進化を渴望すれば、DNAを通じて脳は進化する。

その為にも、意識の高い一部の人々を進化させ、優れた種を生み出すことに全力を費やさねばならない。

内なる光明

私たちの肉体はDNAの被造物だが、私たちの本体は御魂である。御魂は物質として存在しないので、目に見えるわけではない。しかし、その存在を知ることが出来る。内なる光明と温もり、それらが御魂そのものである。

日常をホモサピエンスとして過ごしていると、雑務や難題に忙殺され、本体である御魂の存在を忘れがちになる。やがては、ホモサピエンスの肉体が、自分の本体だと勘違いしてしまう。その結果として、あなたの内側には世相のスモッグや浮世の砂埃が立ち込める。御魂の輝きは力を失い、温もりは遮られる。そして心の土壌は冷え固まり、凍土となり果てる。あなたは被造物である肉体を自分の本体と勘違いしているため、光や温もりを外部に求める。しかし、浮世の寒風はあなたに向かって鋭く吹きつけるだけで、心はますます冷えるのみ。

ここで、自分の本体が御魂であり、そこからは豊穡なる光明と温もりが湧き出ていることに気付いた場合、どうなるだろうか。光明と温もりは、あなたの心を優しく照らすだろう。心の凍土は肥沃な大地へと生まれ変わり、むかし播いた幸福の種は萌芽の喜びに歌いだす。

導命家は、自分の本体は御魂である、と常に意識しよう。
それによって、導命家の内側は、輝きと温もりに満たされる。

自己像を形成する

思考と行動、そして自己像はともに影響を与えあう表裏一体の関係である。侍が侍たり得たのは、明確にして厳格な侍像を作り、それに基づいて思考し、行動していたからだ。あなたの魂が素晴らしくとも、自己像が卑屈であれば、そのような行動を実際にとるであろう。どのような人物になりたいのか、それをしっかり認識することは、とても重要である。

とは言え、ただ好きなように自己像を作ればいいわけではない。精神力も威厳も覇気もないのに、王者としての自己像を作り、それに基づいて振る舞えば、本人は王者のつもりでも実際は道化である。やはり、まずは現実を知ることが大切である。それにはまず、自分と向き合うことが求められる。この場合、自分の弱さや醜さを避けがちになるが、自己像を作るためには乗り越えなくてはならない。

弱さや欠点を認めることは強さの証明である。弱者は己の弱さを認めずに結果として強くなれず、認めたとしても強くなろうとしないため常に弱く、そのまま一生を終える。しかし強者は己の弱さを認め、強くなるために努力する。そして、力強い一生を手にいれるのだ。それに人生とは、心身に美醜をまとい、浮世に清濁併せ呑むこと。生涯にわたって美しく、そして清く生きることなどは出来ない。

大部分の人々にとって、現在の自己像とは、過去の積み重ねを土台としており、未来の自己像は現在を土台とする。時間とは、過去からだけでなく、未来からも吹いてくる。現在を中心に渦巻いた状態なので、我々は変化をあまり感じないのだ。しかし、明確に意識することで時間の風はどんどん吹き込んでくる。

過去の出来事が暗く、触れるだけで凍傷になる程冷たい。さらに煤で汚れており、かつての輝きや色彩を失っている。過去を意識し過ぎているから、寒風が現在そして未来にも吹きつけ、人生そのものを冷え冷えとさせる。この場合は、未来に意識を向けることが大切である。明るく、温かく、歓喜に満ちた将来像。すると、暖かな風が未来から吹いてくる。そして現在と過去を温める。冷たい過去は徐々に溶け、煤は未来の風によって吹き払われ、過去は本来の色彩と輝きを取り戻す。その状態から、自分にとって必要な出来事を選び、自己像の土台に組み込めばいいのである。

一般の人はこれだけで十分だが、導命家は更なる工程が必要である。導命家は、ヒトを越えようとする意志を自己像に錬りこむことが求められる。それは意識の進化に到るのだ。一般的なヒトは、肉体、自己認識共にヒトのままなので、いつまでもヒトのままである。しかし、導命家は違う。あなたの本体である御魂人は、進化をもたらすために今生へ現れたのである。自分の役割を思い出すのだ。当然あなたの肉体は、一般的なヒトと同じだが、意識は進化へ向かう。

進化に到った未来像を持て。
そこから進化の風が吹いてくる。

一日をしっかりと生きる

肉体の命はいつ果てるか解らない。死の門は時と場所を選ばずに現れる。その日に倒れ、肉体を脱ぐことになったとしてもそれは運命だ。それに納得できるよう、日常を大切にし、一日一日を懸命に生きよ。起床してはしっかりと生きることを決意し、就寝前には命あることを感謝しよう。

日常生活を大切に生きるとは、
例えば土台や地面の保守管理であり、
地面に張り巡らした根の弛まぬ活動である。

屋根の飾りや門扉ばかりを磨いても、
土台と地面の補強、管理が疎かになれば、
豪華な建築物も倒壊する。

春の喜びをもたらす桜も、根腐れすれば、花は咲かず、幹は枯れる。
桜の花が春の一時期に咲くのは、それ以外の時に、弛むことなく根が働いているからだ。
冬の日も根から養分を吸って春の来たる時を待ち、枝は静かに形を保つ。

生みの喜び

事を為す際、その大小を問わず、必ず苦しみ、痛みが伴う。そしてそこに目が向くと、気が進まなくなる。この場合は、生みの苦しみではなく、生みの喜びに目を向けることが大切である。出産の痛み、疲労ばかりを見るならば、これほど苦しいことはない。しかしそれでも女性が出産に臨めるのは、新しい命を授かる場面や、子供と手を繋いで一緒に歩いている情景に喜びを見出しているからだ。

何らかのプロジェクトを進める時は、困難ばかりが先に立ってしまう。そしてそこに意識が向かうと、気後れ、余計なストレスによる判断力の低下などに絡みとられてしまう。

しかしながら、実際は少しずつでもプロジェクトは進捗しているのだから、そこにあなたの意識を向かわせ、生みの喜びを実感することが大切である。さらに、生みの苦しみはあって当然だという心構えも同時に持とう。こうした喜びは幸福の種となって、少しずつ、あなたの心に播かれていく。いずれ実が生り、花が咲くであろう。

導命家の人生も同じだ。御魂人はあなたという登場人物を演じ、導命という物語の中を歩む。その過程で、大きな障壁や困難に直面するであろう。しかし、そこにばかり目を向ける必要はない。導命家が意識を向けるべき対象は、意識の進化を果たし、総命の成長に繋がっている事への喜びなのである。

苦難とは心の鍛錬

生きている間は、様々な制約、煩わしい出来事、不条理な展開などが絶え間なく訪れる。それがために、この世を厭う気持ちも起こるであろう。しかし、そうした苦難は、あなたの心を鍛錬する鎚なのだ。

強き心は、鍛錬に次ぐ鍛錬によって生み出される。あなたが強き心を求めるのならば、何度も修羅場を潜り抜けねばならぬ、存亡をかけた内外の敵との激戦を繰り返さねばならぬ、勝利と敗北を重ね常に鍛錬を続けねばならぬ。

侍の鋭きところ、それは腰の刀ではなく、心の刀である。彼らの内なる光明は、白刃の閃き。厳しい自己教育と苦難によって心を熱し、叩き、己の求める侍像へと鍛錬する。あなたは侍でなくとも、あなたの心は侍と同じく鋭い刀であれ。

名刀となまくら刀があるように、心にも名心となまくら心が存在する。なまくら心は、たった一度か二度の敗北で刃を欠き、あるいは刀身が折れる。敗北後はひたすら相手に打たれるがまま、為す術もなく、己の心を鍛錬し直そうともせず、項垂れ、屈辱に耐え忍ぶが、やがては屈辱すら感じぬほど零落する。

あなたはいつまで無様な心を晒しているのか。勝利を求める灼熱の執念によって心を熱せ。激しい闘争の鎚で鍛錬せよ。敗因という不純物を取り除け。経験と認識と覇気を錬りこめ。

そうすれば、あなたの心は、勝利のための刀へと生まれ変わる。

心の3層

1の層 不安、苦痛、恐怖、孤独、自虐、不満

2の層 安心、快楽、勇気、連帯、自尊、満足

3の層 確信、極楽、覇気、統一、名誉、充溢

ヒトの心は、生きている間に3つの層を幾度も辿る。

これは、3の層しか知らないように見える強者であろうと、変わりはない。

むしろ、強者ほど1の層を何度も経験している。

弱者は1の層へ転がり落ちる度に足腰が衰え、やがては立ち上がれなくなってそのまま消滅するが、強者は何度でも立ち上がって3の層を目指す。動く部分が右手の小指一本ならば、小指で這って前に進む。障壁にたどり着けば、小指で掴まり、よじ登る。途中で力尽きようとも、血走った目は上層を睨み付けたままである。

上昇本能、これが強者に共通する特徴である。

そうした猛者のうちの一握りから、天下を掴むものが現れ、それぞれの時代を形作る。

心を整える

心は、様々な考え、悩み、苦しみ、痛み、怒り、しがらみの蔓に巻き付かれている。この状態が過度に到ると、「気」の巡りが悪くなり、血行不良ならぬ「気行不良」を起こす。そうなれば、疲労物質である乳酸は分解されずに溜まってしまい、肩こりならぬ、「心こり」の症状が出てしまう。長期間それが続けば、心こりは慢性化し、厄介な状態を招く。だから、心の乳酸を溜め込まぬよう、日頃から注意を払うことが大切だ。

必要な蔓は、それが勝利や心身の成長から生じている。この蔓がもたらす痛みや悩みは、心の鍛錬に必須である。むしろ積極的に利用すべきであろう。

不要な蔓は、それが嫉妬や虚栄心から生じている。この蔓がもたらす痛みや悩みは、全くもって無価値、無意味。ただ痛いだけ、悩ましいだけ、苦しいだけ、腹が立つだけ。

今あなたが必要な蔓によって苦しみ悩んでいるならば、それは試練なのだから、しっかりと受け止めなさい。

今あなたが不要な蔓によって苦しみ悩んでいるならば、それは無駄なのだから、さっさと断ち切りなさい。

巻き付いていた蔓がずいぶん減ったことだろう。締め付けも軽くなり、心の風通しも良くなった。乳酸も分解され、心こりの症状も改善されたはずだ。その状態で、日常を簡単に見渡してみよう。何気ない新しい発見に出会えるだろう。

身体感覚を鍛える

身体感覚に乏しい者、身体を意識しない者は、総命や多元生命体を理解することが難しい。ゆえに、身体感覚と意識を高め、想像力を鍛える事が大切である。また、小宇宙と呼ばれる人体を通して、生命の機微を知ることは、宇宙を知る事にも繋がる。

① 全身の外観、器官、臓器、細胞、素粒子へと意識を向ける。素粒子の次元にまで意識が到達すれば、地球内外や他の物体との区別は消滅するため、あなたは宇宙と渾然一体となる。身体感覚と意識を宇宙に向かって徐々に拡大し、総命の一部であること、銀河系の一部である事、宇宙の一部である事、多次元生命体の一部である事、そして根源生命の一部であることを実感する。

② 悠久なる生命の流れに全てを委ねている情景を想像する。そして「自分は点としての存在ではない。生物としては非常に儚く一瞬の命だが、導命を通じて未来の人々とも意識が繋がっている。私は幸福で満たされている」と意識する。

これらの方法を実践することで、あなたの身体感覚と意識は、総命や多次元生命との一体感をより強めることができる。

生きるためには理解せねばならぬ。理解するためには学ばねばならぬ。
先人の過ちや成功から学べる者。これは幸いである。しかし実体験からのみ学べる者。
これは不幸である。その経験が先人の多くを殺め惑わせ誤らせたことでも、
体験せねば理解できぬ者はそれを体験せねば理解できない。
そして悲しくも、先人と同じ道を歩む。結局は、新たな教訓の傍らに屍を横たえる。

教訓を嘲笑い、経験からのみ学ぶことを是としている。しかし経験から得るべき本質を認識する力もなく、ただ経験の樹木に近づきさえすれば理解できると勘違いしたまま、認識の果実を手にとろうともせず、ひたすら同じ道を狂気さながらに往還する。経験を貴ぶその心は勇ましいが、さりとして結末への覚悟もなく、冷酷な現実が一睨みすれば、糞尿垂らして泣き叫ぶ。己を恨まず周りを憎み、自ら招いたその結末を、周りに押し付け逃げ惑う。生きていれば何度でも。死ぬまでこれを繰り返す。死んでしまえば似た者が、その跡たどって滅び去る。

賢人は、経験の樹の下を通れば、必ず認識の果実を食べ、自らの血肉とする。
先人の積み重ねた経験の書籍を読んで追体験し、そこから独自の見識と普遍的な教訓を得る。

欲望の大河

導命家は澆刺とした生命力を発揮し、内なる光明をより輝かせ、大いに、堂々と生きてゆく。そのためには「欲望を上手く利用する」ことが大切である。導命では、欲望を退けず、また奉戴しない。導命は、欲望を認め、治め、活かす。この3法を基本的な態度とする。

欲望とはいわば水である。誰しものが源泉を持ち、そこから「こんこん」と湧いている。まずは、水の存在を認める。そこに水がある、と素直に受け入れるのだ。すなわち認欲である。次に、その認めた水を、治める。つまり治欲である。その次は、普通ならば欲を「満たす」となるが、導命では異なる。欲を「活かす」のである。活欲である。

活欲について具体的に述べよう。活欲とは、欲望を満たすために必要な手段、仕事、作戦などに焦点を当て、それらにエネルギーを注ぎこめ、そうすれば欲望は自然と満たされる。という考えである。活欲の優れている点は、手段や作戦の遂行に必要な忍耐量、精神力、集中力、そして閃きを次々と生み出してくれることである。

欲望そのものに善し悪しはない。善悪の対象とされるべきは、欲望に基づいた振る舞いであり、さらに言えば、その振る舞いが与える社会的な影響なのだ。ある者は欲望によって墮落したが、欲望を活かすことによって成功した者も存在する。欲望ごときに引きずられて墮落するのは、その人の意志が弱いからに過ぎない。そしてその様な人は欲望を退ける事もできずに破滅する。成功するしない、迷惑をかけるかけないは、当人の振る舞いの結果である。

さて、少しばかり視点を移し、欲望の河川を見てみよう。ああ、滔々とした、雄大な流れだ。素晴らしい大河川、つまり大欲である。おや、あそこで欲望におぼれているのは、普段禁欲を説いている欲望悪玉論者たちではないか。ああ沈んでしまった。素直に認めていればよいものを。あれは、何をしているのだろう、欲望の流れを堰き止めようとしているのか。しかし、堰き止められた欲望の水は、アブノーマルな方向に流れ出してしまったぞ。ああその流れに彼も巻き込まれてしまった。欲望を無理に堰き止めず、素直に治水すればよいものを。

最後に導命家諸賢に伝えておきたいことがある。大欲の大河川に関してだ。大河は治水を施さねば、絶えず氾濫を繰り返すが、適切な治水を施して活用すれば、その流域に偉大な文明をもたらす。

大欲もそれを放置すれば周囲に甚大な被害を与えるが、意志を以てこれを治め活かせば、非常に有益なものとなる。

歴史という物語

この世は物語の複合体であり、物語は脳の数だけ存在する。意識しようとしまいと、誰しものが何らかの物語に準じて考え、行動している。御魂人があなたという登場人物を演じるための脚本、と考えてもらえればいいだろう。

物語の種類は多岐にわたる。神様は存在する／しないという物語、死後の世界は存在する／しないという物語、魂は存在する／しないという物語、人間は尊い存在という物語、人間は生まれながらにして罪深いという物語、全ては物質によって作られているという物語、人間の歴史は階級闘争の繰り返しという物語、DNAは偉大な存在が作ったプログラムという物語、あらゆることは幻覚に過ぎず実際は何も存在しないという物語等々。そして、高次方程式や軍隊のように、大きな物語には中規模の物語が幾つか収まり、中規模の物語は小さな物語、いわばエピソードとでもいうべき様々な出来事で成り立っている。ある者は大きな物語を脚本とし、またある者は中規模の物語を脚本とし、そして別の者は小さなエピソードを脚本として人生を全うする。

物語の中で最も強力な部類に属する存在が、いわゆる「歴史」である。歴史とは作り話であること、何者かによって都合よく解釈された勧善懲悪の物語であることは、それこそ歴史の常識である。それを踏まえた上で、私の考える歴史像を紹介したいと思う。

〈歴史を作る者（history maker）〉

歴史を解釈する権利は、戦争の勝者、即ち支配者にのみ与えられている。そして、支配者に都合よく解釈された歴史が、所謂「歴史」と称される。つまり歴史とは、支配者によって紡がれた勧善懲悪の物語であり、支配者とは物語を作り出して制定する者、history makerなのである。

被支配者は、新たに制定された歴史を素直に信じるか、あるいは信じることを強要される。歴史の正当性や事実を疑うことは許されず、疑った者は世間から糾弾され、法的に罰せられ、場合によっては殺害、または処刑される。

歴史観の強化は、そのまま支配権の強化に直結するため、支配者は定期的に歴史観の保定作業を行う。戦勝記念セレモニーはその好例である。保定のみならず、場合によっては修復、改修も行う。

次の時代を創る者は、総じて新たな物語を準備し、その内容は、現統治者の正当性を否定、または疑問視した構成となっている。そして新たに支配権を確立すると、前任者とまったく同様の手法を用いる。つまり、己の物語を歴史と称して大衆に啓蒙または強要し、セレモニーを定期的に行い、物語の真実性や正当性を疑う者を処罰する。その後、新たな勢力が新たな物語を掲げて

台頭し、これとの戦いに敗れ、悪逆非道の人物として新たな歴史に取り込まれる。

もしかすると、あなたは知らないうちに、歴史という手枷足枷を嵌められているかもしれない。一般人は、歴史という創作物が真実であると勘違いしているが、導命家であるあなたは、歴史から自分自身を解放しなくてはならない。手枷足枷を外して自由になった後は、新たな物語を紡ぐのだ。それがあなたの役割である。その為にあなたは肉体をまとい、名を授かったのだから。

生物の行動原理は古代から一貫している。繁殖と捕食に有利な生存環境の獲得、維持、拡大、そして生殺与奪権を巡る争いがそれである。人間に到っては、経済、法廷、家庭などありとあらゆる場所で生存闘争を繰り広げている。

こうした争いの、もっとも苛烈な形態が戦争である。20世紀は世界大戦を二度経験した。これらの戦争を通してヒトは何かを学んだと言えるのだろうか。ファシズムや軍国主義は否定されたが、戦争そのものは外交手段、金融・経済の潤滑油として堂々たる地位を占めている。戦勝国の引き起こした戦争や紛争の数々を見れば一目瞭然であろう。

では、宇宙の時代が始まった場合はどうなるだろうか。宇宙条約で宇宙空間の軍事利用は禁止されているが、戦後の歴史と人間の本能を鑑みれば、条約に抑止力としての役割は期待できない。軍事権を掌握する集団にとって、戦争が利であれば軍事力を行使する。条約の遵守が利に適わなければ、その集団は条約を破棄するか、あるいは解釈の隙間を通り抜け、独自に行動するだけだ。

将来世界政府が誕生し、世界市民、地球人意識が醸成されたとしても平和は訪れない。戦争や紛争が支配層に莫大な富をもたらす構造は変わらないからだ。彼らは、世界政府幹部の派閥抗争、世界政府の支配に対する反発、世界市民同士の対立などをもとに独立戦争、大小規模の紛争を惹起するであろう。衝突する集団の単位が国民から世界市民になるだけだ。国境線が消えようとも利害の境界線が人々の間に横たわる限り争いは続く。地球外共同体が誕生し、さらには新種人の国家が誕生しても戦争の可能性は十分存在している。未来永劫、戦乱の火種は尽きることはない。いわば、恒久的戦国時代。これが生物の定めである。

ここまで読むと、導命は平和に対して消極的な考えのように映るだろうが、それは違う。導命は平和を拒むどころか、むしろそれを希求する。ただ、平和は絶対に実現しないと確信している。理由は既に述べたとおりだ。しかし平和が実現せずとも、平和に近づくことは可能だ。これこそが導命家の、平和に対する姿勢である。

人間の世界を平和に近づけるためには、ヒト種よりも強大な種による管理が必要となる。圧倒的な軍事力と科学力による徹底した管理。人間以上の存在でなければ人間を管理できない。そのためにも、我々は新たな種を生み出さねばならない。いずれ導命家は、平和に近づけられるだけの力を手にする。そのためには多くの戦いが必要である。そこに到るまでの行為は平和から遠く感じるだろうが、それこそが平和へ近づくための唯一の道なのである。

しかしあなたはこう懸念するだろう。新たな支配者が好戦的だったら戦争は終わらない、と。確

かに、新種人による管理下でも、果たして平和と呼べる状態に到るかどうかは定かではない。しかし、導命家は平和に近づくことを希求する。ゆえに、新種人の導命家によって支配と管理が実施されるのであれば、人間は人間自身が統治するよりも安全な環境を手にすることができるのである。

志

志とは人生の大骨格。意志とは精神の血液。ゆえに、有志者と無志者は、生物としては同じヒトであろうとも、生き様においては全く別個の生物である。動植物が自種を中心として群生するように、有志者は有志者と共に生活することが自然である。 戦国武将が己の欲望と才覚を信じたが如く、幕末の志士が己の役割と情熱に殉じたが如く、有志者も己の志に従って一心に生きることが大切なのだ。

志は批判を受けることもある。有志者は、それを心身の成長に役立てること。感情的な批判や誹謗中傷の類は論外だが、技術的、論理的な問題点などを的確に指摘している有益な批判には、きちんと耳を傾け、己を高めるための材料とすべきである。批判されているからと言って感情的に拒絶するのは、非常に勿体ないことだ。退けるべき内容は退け、受け入れるべき内容は受け入れるという毅然とした姿勢が、己を強くし、成長させるのである。また、相手に批評させることは、その人物の知能、価値観、観察力、性格、常識等を判断するうえでは大変有効である。

有志の導命家よ。生の激流に志の杭を打ち込み、死の暴風に精神の旗をなびかせよ。
志ある死は志なき生に勝る、そして、志ある生は全てに勝る。

命を大切にする

名のために 棄つる命は惜しからじ 遂に止まらぬ 浮世と思えば 平塚為広

平塚為広の辞世の句に見られる如く、肉体の生命以上の存在に生命としての価値を見出し、その存続を願う者にとって、自分の命はただ只管に手段である。彼は、肉体の生命よりも、武人としての名を最も尊重した。関ヶ原本戦では大谷吉継に属し、小早川秀秋や藤堂高虎の兵を相手に奮闘したが、最期は榑井太兵衛に討ち取られた。武人として見事な討ち死にである。

もし彼が、武名を最大限に尊重していながら、ただ肉体が死ぬことを恐れて投降し、徳川家康に許されたとしよう。そうなった場合、戦国武将としての名は残ったであろうが、そこには、現在我々が見出しているような生命の輝きは無かつただろう。肉体以外の生命を大切にしたがゆえ、彼の武名は現在もなお澆刺としており、豊かな生命力を湛えているのだ。

導命家も、平塚為広の様に、肉体の命を大切にしなければならない。導命家にとって、自分の命は手段であり目的ではない。導命家の目的は、肉体を纏ったその意義に応え、名を授かり役割を担ったその栄光をさらに輝かせることだ。志の道の先に、あるいは役割の向こうに死の門が見えたとしても、導命家は堂々と突き進み、意気揚々とその門をくぐる。

善悪と利害

ホモサピエンスの世界で使用されている善悪は、判断者の利害を基準とする。判断する者に利益をもたらせばそれは善であり、損害をもたらす場合は悪となる。利即善、害即悪。利害の共有は善悪の共有。そして善悪利害の形は時と共に移り変わる。

締結された契約の履行と反故は、取引相手によっては善悪利害によって決定される。判断者にとって契約の履行が利であれば履行し、反故が利であれば反故にする。そして、利は善であるから、判断者にとっては正しい行為なのである。よって、契約の反故を悪だと批判しても効果はない。相手の契約反故を防止するためには、物理的社会的経済的法的心理的軍事的報復手段を周到に準備し、契約反故による利益よりも報復による損害の方がはるかに大きく、さらに報復は必ず実行されと思わせることが必要である。そのうえで契約を結べば、大抵の場合、契約は履行される。賢者は契約相手の倫理観や思考方法に基づいて相手の考えや行動を予測し、利益を得る。愚者は自分の倫理観や常識に基づいて相手の考えや行動を予測し、全てを奪われる。

善悪の判断を社会に委ねている者たちは、社会が暴力を悪と見做している場合、社会悪の名のもとに暴力を否定する。しかし、一旦社会が暴力を善と見做した場合、社会が許容する限りの暴力行為を、社会善の名のもとに行行使する。

敵への対処

警戒されないように、表面的な友好を装いつつ、様々な形に擬態して包囲を進める。敵を信用させるのは、警戒心を和らげることで相手の抵抗を抑制するため、そして来たるべき時の「裏切り」を効果的にするため。敵対心を持っている人物や集団を、表面上の善意や友情のみで信用することは、愚の骨頂である。相手の敵対心を見抜けず、「彼らの友情は真実である」と致命的な勘違いを犯した個人や集団は、生命の掟に従い宇宙から消え去る。

敵に対しては、紳士的に振る舞うことが効果的ならば紳士的に、友好的に振る舞うことが効果的ならば友好的に、高圧的に振る舞うことが効果的ならば高圧的に、暴力的に振る舞うことが効果的ならば暴力的に、平和的に振る舞うことが効果的ならば平和的に、好戦的に振る舞うことが効果的ならば好戦的に振る舞え。そして、そうした振る舞いを真実だと思わせることが効果的ならば真実と思わせよ。偽りだと思わせることが効果的ならば偽りだと思わせよ。敵に対しては、騙す、利用する、滅ぼす、の何れかで対応すべし。

友好に擬態した包囲網を形成すると同時に、道義的な批判も常に行い、倫理的に優位な立場を維持すること。相手が譲歩すればその分だけ政治的要求を強め、受け入れ不可能な要求を執拗に突きつける。それと同時に、自分の弱点を意図的に作っておく。進退に窮し、憤激に駆られた相手はそこを攻撃してくる。大義名分を手に入れた後は、自陣の正義を声高に唱え、相手の邪悪を批判し、全面攻撃に移行する。

攻撃については、相手の弱い部分を狙うこと。戦域よりも戦線の方が防御は弱く、戦線よりも拠点の方が潰しやすい。立体よりも面、面よりも線、線よりも点を狙うのである。敵組織の連携を断ち、情報や物資など戦力を維持するために必要な要素を遮断し、点の状態で孤立させる。戦力差で優位に立ったとき、満を持して総攻撃をかける。

戦力差については、自軍と敵軍の戦力差を優位に保つことが重要である。よって敵戦力を分散させ、戦力差が優位になった後に攻撃すること。自軍が寡兵ならば尚更である。

大規模な戦いを行う場合は、必ず敵の内部分裂を画策し、敵勢力を分割すること。その際は敵内部の禍根を刺激することがよい。関ヶ原の戦いでは、徳川家康は豊臣家臣団の禍根を刺激し、文治派と武断派を敵対させ、分裂を誘発した。禍根が宗教、民族問題、一族の対立など個人では解決できぬものであり、さらにそれらがアイデンティティーの基盤ならばより強固に作用する。

戦いでは、規模の大小に係わらず戦略が要となる。小田原征伐の際、北条家は、豊臣軍が補給不足によって自滅することを前提に籠城戦という戦略をとったが、秀吉は大量の大型船を動員して物資の補給を行い、一夜城を築城した。これによって、北条方は戦略の前提が崩壊したことを

悟り、秀吉に降伏した。このように戦略の前提と戦略は土台と家屋の関係である。作戦開始以前に前提が崩れた場合、必ず前提から練り直すこと。それが出来なければ、作戦を中止しなければならない。無謀な作戦の強行による組織の壊滅は、作戦中止による損失とは比べ物にならない。

敵の戦略を無力化するには、その前提を見抜いて打撃を与えればよい。前提を知るには、前提それ自体だけではなく、敵集団の価値観、思考様式、歴史、文化といった前提の前提についても考えることが重要である。その際は思考や観察眼を曇らせる要素、つまり虚栄心や希望的悲観的観測などを可能な限り排除した、虚心坦懐の心構えで行うことが肝要である。

組織と指導者

国家国民、企業社員の中で緊張感や危機感が薄れると、厳しい生存闘争の社会ならば到底認められない基準で指導者を選ぶようになる。本来ならば、致命的な一撃に対する危機感と責任感と緊張感を有する人物こそが指導者の候補に挙げられるべきであるが、慢心に浸った組織ではそれらの条件は疎んじられ、全く正反対の基準により、指導者として不適切な人物が選ばれる。

- 1 平時と有事においても有能な人物。
- 2 平時は無能だが有事において有能な人物。
- 3 平時は有能だが有事において無能な人物。
- 4 平時と有事においても無能な人物。

どの人物を生み出し、どの人物を指導者を選ぶかで、集団の資質が明らかになる。集団の存続に関わる危機的な状況においては、特にその傾向が顕著になる。4を生み出し、4を選ぶ集団は4と同じく無能であり、1を生み出し1を選ぶ集団は1と同じく有能である。

優れた人々は優れた組織を生み出し、優れた組織は優れた人物を指導者を選ぶ。作戦や事業に失敗した場合、彼らは指導者のみではなく、組織、そして人々にも問題点があると考え、それらの検証を行い、改善を施し、次には勝利する。劣った人々は劣った組織を生み出し、劣った組織は劣った人物を指導者を選ぶ。作戦や事業に失敗すれば、劣った指導者のみに責任を求め、組織や人々の落ち度は棚に上げるか認めようとせず、問題点を放置したまま同じような危機に直面し、敗北または滅亡する。

起こり得る致命的な一撃にどう対処するのか、ここに指導者と集団の本質的な力量が現れる。この一撃を軽視し、対策についての合意を得られない場合、遅かれ早かれ、その一撃によって滅亡する。軍事的脅威が致命的一撃となるならば軍備や外交力に、自然災害がその場合は防災に全精力を費やすべきである。これらの一撃を軽視する人物は指導者として三流であり、こうした人物を指導者に据える組織や人々は五流である。

責任感と危機感を持ち続け、時には自己犠牲をも厭わない行動を選択し、敢然と実行する者。
責任回避と現実逃避に奔走し、常に他人を犠牲にして自己保身に走る者。
どちらも指導者の典型的な特徴である。

民主国家では政治家と有権者の水準は正比例する。そして人間が自分の顔を肉眼では見られないように、有権者は自分自身を省みることが出来ず、政治家も同様である。よって己を知りたいならば相手の顔を見ればよい。いわば両者は鏡でもあるのだから。民主的に選ばれた政治家が批判されることはあるが、彼に投票した有権者が批判されることは滅多にない。

世間

世間とは、風見人間による壮大な悲喜劇だ。風見人間の頭や首は、世間の風に従って、右にも左にも、過去にも未来にも、ありとあらゆる方向にクルクルと回転する。

みよ、あの誇らしげな英雄と、彼を讃える風見人間たちの演劇を。嗚呼、風向きが変わって逆風となった。その途端に、拍手は拳となって英雄を打ち、賞賛は罵声となって彼の名誉を砕く。先ほどまでの威風堂々とした姿は一変し、今やみすぼらしい敗北者の影を引きずっている。おや、また風向きが変わった。拳は再び拍手となり、どす黒い罵声は黄金色の賛美となった。しかしそれも束の間、風は別の人物の為に吹き始めた。するとどうだ、風見人間の頭は新しい役者に向けられた。かつての英雄は舞台から退場し、忘却の墓場に向かう。そして世間では、相変わらず同じことを繰り返している。

世間とは、まさに雲の如し。形は定まらず、場所も不定、雨雲もあれば雷雲もある。世間の形に従って自己評価する者は、雲の位置で自分の居場所を定めるに等しい。世間の評価に信用を置くな。風見人間を信用するな。しかし、世間と風見人間から目を離してはならない。知らぬ間に陰鬱な雨雲や凶暴な雷雲が頭上を覆い、気まぐれな飛礫があなたの名誉を砕くかもしれない。

導命家よ、いつまで風に耐えることを美德としているのか。なぜ風下に甘んじているのか。颯爽と風上へ向かえ。己の風を吹かせるのだ。その為に刻苦勉励し、実力を身に付けよ。

いつの日か、あなたが風を起こす時には、次の言葉を思い出すがいい。

適度な風ならば心地よい幻覚を与える。

しかし風が強すぎると、その幻覚を吹き飛ばして反感を引き起こす。

民衆は、一人一人であれば理性的でも、群衆の一部と化して思考する場合、輝かしい知性は曇りがちになる。彼らは、理性や論理や客観的事実ではなく、脳内に浮かび上がった心象風景への好悪感情に基づいて物事を判断するのだ。

ゆえに、現実の目的地が急峻な崖であろうとも、心象風景が緑豊かな草原であれば喜んで指導者に従う。そして冷静な者や自分で判断できる者が、この先は崖だ、地形から容易に判断できる、奴らは甘言を弄して君たちを騙している、などと警告しても嘲笑や悪罵を投げつけるのみで、一切聞く耳を持たない。

しかし、到着間近になってようやくおかしいことに気が付き、一部の者は騙されていたと騒ぎ出すが、殆どの者は訳が分からぬまま谷底へ転落する。

民衆を動かしたければ、第一に、特定の方向性を伴った心象風景を抱かせること。第二に、心象風景に対する好悪感情を継続的に生み出すための平易な論理を植え付けること。第三に、指導者は民衆の側にいると思わせること。

さらに付け加えるならば、欲望と恐怖を刺激することも重要である。なぜならこの二点は、最快樂と最不快をもたらす為、容易に集団心理へと発展するからだ。ひとたび大衆心理化された欲望や恐怖は、それ自体が世間の海流を生み出し、個々の構成員を無理なく目標地点まで運ぶのである。

時代を創る者たち

時代や分野が飽和に近づくと、あちら此方に新時代の種子が現れる。霊感的閃き、卓抜した感受性の持ち主が、幾数多の種子の中から未来の芳香を嗅ぎ取り、果敢に選択する。新時代の種は、感性の鈍い者、鼻の利かない者、興味が無い者の目の前を、たんぽぽの綿毛の如く漂うこともある。しかし、彼らは気付かない。

次の時代の種子に気付いた者、これを先見性のある者、先見者という。

先見者の中で、新時代の種子を握りしめ誰よりも早く未来へ駆けた者、これを先駆者という。

先駆者の中で、新たな時代の生存圏を切り開き、そこに種子を播き、新時代の萌芽まで至った者、これを開拓者という。

開拓者の中で、支配的な栽培・剪定の型を創造し、開拓地に新時代の花を咲かせ、時代の象徴となった者、これを創型者という。

創型者によって作られた時代や分野の型が成熟あるいは飽和に到ると、あちらこちらに新時代の種子が現れる。それに続いて新たな先見者、先駆者、開拓者、そして創型者が生まれる。

天才秀才そして凡才

天才は、型のパターン認識に優れ、超人的な執念で事業に取り組み、霊的な閃きに満たされ、従来の支配的な型にはそれほど取り入れられていない新しい要素を組み合わせで独自の強力な方法を考案し、その分野に支配的な型を創造する者である。天才の人物例は、北条早雲と織田信長である。早雲は領国大名という型を作り出し戦国時代の幕を切った。信長は、貨幣を基軸とした傭兵制と鉄砲の集中使用による戦法というその後の支配的な型を創出した。

秀才は型の性質や構造をよく理解し、その範囲内で優れた働きをする者である。自ら型を創造することはないが、必要に応じて型を改良する技に長けている。天才の型が広く行き渡るか否かは秀才の力量に依るところが大きい。織田政権下における明智光秀と羽柴秀吉、そして豊臣政権下における石田三成が秀才に当たる。

凡才は型を創造したり改良することは殆どなく、天才と秀才によって創造、整備された型に従うのみである。型への順応は天才と秀才に比べて容易である。初めは多少戸惑いつつも、その時々型の型に自分を合わせる事が出来る。社会や政治の型を例にとろう。宗教主義社会では神を信じ、経典に従う。民主主義社会では自らの主権を声高に叫ぶ。軍国主義社会では好戦的スローガンを高らかに唱え、正義の名のもとに人を殺す。平和主義社会では朗々と平和を賛美し、戦争を憎み、軍隊を罵る。凡才は型を創れないが、どのような型にも収まることが出来るため、時代が変わっても生き延びる。天才は型を創るが、他の型に収まることが出来ないため、時代が変わると滅亡する。これが天才と凡才の大きな違いである。

天才の偉業は本人の力量だけで為し得るものではない。いわば合同作業の賜物である。北条早雲の場合は、応仁の乱によって室町幕府体制の統治能力が著しく低下していた。織田信長の場合は、早雲の築き上げた領国大名という社会の型が既に存在しており、更には鉄砲という道具も実用化されていた。そして貨幣経済も高まっており、彼は経済都市の尾張に生まれ育った。これらの複合的な組み合わせによって、彼らの偉業は達成されたのである。

これは現代科学にも言える。基礎研究の確立、最新の実験器具、タブーの緩和、社会的要請などの諸条件に、天才科学者の優れた知能や発想が組み合わさって、いわゆる天才的な業績が誕生するのである。これとは逆に天才的才能が孤立している場合は、その時代の無知や偏見に埋もれ、後世の手によって発掘されることが大方の運命である。

役割や仕事に邁進する

導命家の目的は総命を導くことであり、その手段として自らを進化させるわけだが、目的はそれだけではない。今生を幸福で充溢させることもまた、重要な目的なのだ。生涯を幸福感で充溢させるには、己の役割を果たせばよい。役割を果たすためには、まず己の役割を知ることが肝心となる。では、その役割を知るためにはどうすればよいのか。御魂人としてのあなたは、手ぶらで今生に現れたわけではない。今生を実りあるものとするための道具を持っている。それは、才能と能力である。才能や能力は、役割へと繋がる道標となる。能力は役割を示唆し、才能は役割を明示するのだ。

役割に従事するに当たっては、当然ながら成果が求められる。無能な者はその分野で排除される。苦手な分野でいくら努力しても結果は思ったようにはついてこない。各分野で成功している人は、大抵才能を活かせる場所にいる。もし好きな分野と才能が違った場合はどうするのか、であるが、これはありえない。本当の才能は分野と一致するからだ。その才能は、御魂人が今生で活かす為に持ってきたわけだから、才能の持ち主は、それを活かそうと渴望する。歌唱の才能がある人は人前で歌うことを求める。

才能は、芸術やスポーツの場合の様に、一見して明らかなものばかりではない。普段人目に付きにくい才能もある。それは、才能を見抜く才能、才能を育てる才能、才能を生かす才能。いわゆる名伯楽である。戦国時代の名将は、人物の才能をよく見抜いた。そして彼らの力を借りて幾数多の戦に勝利し、その名を後世に残した。あなたが今生で事を為したければ、この才能を鍛えあげることが最も重要となる。そして、あなたが才能を育てたい、才能ある人に出会いたいと渴望しているなら、それはあなたの今生での使命である、役割である。大いに活かすこと。

これといって才能がない者や、やりたいことが見つからない者は、自分の能力を見出し、それを磨き、活かすことが大切である。ヒトは程度の差はあれども、みな必ず何らかの能力を持っている。例えば平凡なサラリーマンには、一つ所で地道に懸命に仕事を続けるという重要な能力が備わっている。従業員が安定してその場にいるからこそ、組織は実体を保つことができるのだ。才能と能力を区別して書いたが、双方には共通点がある。それは常に修練を必要とすることだ。実が生らずとも、花が咲かずとも、陽が当たらずとも、水は適度に与え、剪定を行うこと。必ず何らかの形で、役立つ時が来る。

才能ある導命家は一本の樹木である。豊かに実が生り、樹液があふれ出る。それを求めて、多くの者が集まってくる。総命の成長を促進するための刺激となり、養分となるならば、あなたを慕う者に果実を与え、樹液を提供すること。あなたの才能を、総命の成長に活かすことは、あなたの義務であり役割であり、そして幸福なのである。

結婚の織布

結婚生活は、一枚の織布である。

その織布は、
夫婦や家族で織り上げた日常生活という生地、
愛情や世間体という縫い糸、
前向きな心という縫い針によって形作られる。

将来像の型紙に沿って一日分だけ生地を織り上げ、その日の色彩に染め上げる。
人間関係や出来事等の紋様を生地に描き、色を挿す。
出来上がった今日の生地を、縫い糸と縫い針を用いて昨日の生地と縫い繋げる。
この作業を一日、一日と積み重ね、いつしか一反の反物あるいは一枚の着物が生まれる。

出来上がった布には一日として同じ物はなく、また、明日も生地を織れるとは限らない。
ゆえに日々を大切に、感謝しながら生きていこう。

仲睦まじく、日々の生地を織り続けられることは、実に幸せである。

部分と全体

あなたの臓器たちが、其々の機能に優劣を設け、争っているとしよう。心臓は血液を送り出すから偉いと主張し、肺は酸素を取り込むから誰よりも優れていると自惚れる。赤血球は心臓と肺に対してストライキを起こす。彼らのやり取りには、生命の維持や発展に関わる本質的な意義があるのだろうか。部分と部分とが、機能的な差異だけを巡って優劣を競うことに。あなたにとっては無意味かつ迷惑であり、ただ器官として機能してくれたらそれでいいのだから、一体何を争っているのか理解に苦しむであろう。呆れたあなたはこう語りかける。

「お前たちは私という全体を構成する一部として機能しているのだから、単独での価値を比べあっても意味はないよ。自分を知りたければ、まずは全体との関係性で考えることだ」

しかし臓器たちにその意思是伝わらず、彼らは全体像が欠落したまま、俺が一番だ、俺があいつを支配する、俺はあいつより優秀だ、と今でも争っている。そして、あなたの健康は徐々に蝕まれていく。ヒトが総命の体内でやっていることも、畢竟これと同じである。

導命家は、部分的な差異の是非を、全体、すなわち総命との関係で捉えなければならない。導命家は、総命という全体の成長を常に意識して活動するのだ。そして導命家の競争は、総命の成長に益さねばならない。それはつまり、導命家が進化するということだ。進化の為の競争ならば、優越感ならば、それは生命の掟に適う大変素晴らしいことである。

魂と魂の交感

一般的に行われる肉体次元での性行為は当然心地よいが、魂が本体であると自覚している者にとって、肉体は衣服のようなものだから、完全に満足するほどではない。例えば、服を着たまま抱き合っても、肉体ほどの満足は得られないように。やはり、あなたの本体と相手の本体が交わる、魂次元での交感こそが、理想的な姿と言える。

この場合、ただ交わるのではない。御魂人は、それぞれが霊的エネルギーを持っている。交感時には、互いのエネルギーが交じり合うことを意識し、最終的にはエネルギーの統合にまで至ることが大切である。

今生では、魂と魂の交感の機会を得ることは非常に難しい。
なぜなら、御魂人と自覚する者は少なく、
魂と魂が共鳴・共感するような出会いも稀だからである。
殆どの出会いは、肉体次元での交わりに終始してしまう。
もし、魂と魂の共鳴し合う人と出会えたならば、
それはじつに幸せなことである。
その出会いを大切にしてください。

富と権力

目的を達成するためには、現実的な力が必要となる。代表的な力は財力と権力だ。ゆえに富と権力の獲得に時間と労力を費やすことは大切である。

この場合、富と権力は目的を実現するための道具、手段といえる。高みに登る事が目的とすれば、梯子は手段であり、梯子を購入する資金が富だ。多くのヒトは、梯子を手にした途端、本来の目的である高みに登る事を忘れ、梯子に掴まっている事が目的となり、やがて梯子もろとも腐敗する。最後は腐った段を踏み割り、惨めに転落する。またある者は、梯子を買うために金を稼いでいたが、時が経つにつれて金儲けが目的となり、無駄な出費になるからと梯子は買わず、かつて憧れた「高み」には目もくれず、虚構のマネーゲームに没頭して生涯を終える。

導命家は目的と手段を峻別し、自律ある行動をとらねばならない。導命家の目的とは、総命を導くことだ。その為に意識と肉体を進化させる。それには富と権力が必要となる。全てを意識と肉体の進化に捧げてこそ導命家である。進化に到るための手段に過ぎない富と権力に魅入られて、本来の役割を見失わぬよう注意しなければならない。

導命家は次の事を思い出すのだ。あなたは御魂人が演じている登場人物であり、この世は舞台であるという真実を。

富も権力も、畢竟、肉体の次元における価値に過ぎない。

愛すること

導命家にとって、大切な心の働き。それは、愛すること。

愛するとは、あなたと他の生命を、光と温もりで満たし、一つの生命体を作ることである。
双方の間に精神の血液が通い、感情の神経が繋がる。

他の生命は、馬、犬、本、建築物などのように形のあるものから、
名誉、思想という無形の存在まで様々である。
全ては根源生命によって生み出された生命体なのだ。

総命を愛の対象と捉える導命家は、自分と総命を一つの生命体とすることが出来る。
名誉を愛の対象と捉える導命家は、自分と名誉を一つの生命体とすることが出来る。
志を愛の対象と捉える導命家は、自分と志を一つの生命体とすることが出来る。

根源生命への至高の愛は、生きる事への愛に繋がる。
この愛によって、あなたの人生は、歓喜と幸福と情熱と美に満たされる。

小さな幸せに感謝する

大きな幸せが欲しいけど、なかなか手に入らず、それゆえに自分は不幸だと考えているのか。ああ、なるほど。不満に塗れたその顔で、あなたの日常を見つめていても、大きな幸せには届かないはずだ。それどころか、本来なら手に入っているはずの幸せさえも、あなたには届かないだろう。不平に満ちた日常を土台にしても、それは砂のように儚く、泥沼のように沈むだけ。手を伸ばせばその分だけ、幸せは遠ざかってしまう。

あなたがその幸せを、あるいはまだ見ぬ幸せを求めるならば、身近にある小さな幸福の積み重ねを土台として、大きな幸福に手を伸ばしなさい。

小さな幸福に気付くには、「当たり前」の考えを減らしなさい。何事もなく、平静に過ぎていく日常は、実に有り難い事なのだ、幸運なのだ。地球が軽く跳ねるだけで、人間の営為はいとも簡単に粉碎される、たとえあなたが富貴でも剛毅でも。

「当たり前」が減ったのなら、そのままあなたの周囲を見つめ直してみなさい。家族、友人、同僚、今日の朝食昼食夕食、一通の何気ないメール、そして一杯の水。全てに、今までとは違った輝きが見えないだろうか。その輝きに美しさを感じないだろうか。それが、あなたにとって一番大切な幸福なのだ。その幸福は、あなたに微笑みをもたらすだろう。

自律と自立

心を最善の状態に保つには、自らを律することが必要となる。

自律によって保たれる導命家の心とは、内なる光明の輝きと温もりに満ち溢れた状態である。

自らを進化させ、総命を導く者にとって、それは必須と言える。

進化を厭うホモサピエンスの妄動によって、内なる光明の輝きと温もりが乱されないよう、

自律心をしっかりと働かせ、理想的な心の状態を保つこと。

自律の次は、内的な自立を目指すことが求められる。

導命家は進化だけでなく、幸福も追求する。

幸福とは、心の作用によって生まれる。莫大な富や社会的な成功は、その作用に影響を与える外的な要因であって、幸福そのものではない。

導命家にとっては、心に作用する内的な要因が最も重要である。

内的な要因とは、満足、余裕、そして感謝である。

満足は心に余裕を生み、余裕は周囲への感謝へと繋がる。

幸福とは、感謝へ至る一連の状態そのものである。

満足、余裕、感謝。

これらは一見すれば他愛もなく手に入り、容易に実践できそうに思えるだろう。

しかし、実際はどうだろうか。何かに満足してもしばらくすれば不満を覚える。

心に余裕ができて時間経てば雑念で埋まってしまう。

周囲への温かな感謝もやがては冷え冷えとした恨み辛みへと変わる。

そのことを反省し、改めて満足と余裕と感謝を心掛けても、やはり同じような経過をたどってしまう。

我々の日常に思いを馳せれば、内的な要因を満たすことの難しさがよくわかるはずだ。

感謝が出来ること。心に余裕があること。満足していること。

これ、まさに幸福であろう。

この幸福へ至るためには、内的な要因が、外的要因の支配下にあっては意味がない。

それに左右されず、動じることなく、自らの足で立っている状態、すなわち、内的自立が求められる。

心の自立は幸福の土壌となる。

自律心を太陽として、自立心の大地を照らし、幸福を育む。

古来より一貫して、指導者の役割とは組織や民衆に進歩と安寧をもたらすことである。そして従来は、もっぱら人間の幸福に主眼が置かれていた。蒸気機関を発明して得意になっていた頃は、まだそれでよかった。そう、あの頃は、無邪気だった。しかし、現在は違う。無計画な開発による資源の枯渇、大量の核兵器などは、ヒト種の生存のみならず、地球環境にも巨大な影響力を持っている。道具と破壊力ばかりが拡大し、有効な倫理や制御能力を備える暇もなく、我々はここまで来てしまった。己の利益を最優先させるがあまり、下手をすれば共倒れ、あるいは他の生物を巻き込んで全滅するかもしれない時代なのだ。

20世紀半ばまでは帝国主義が主流だったが、その後は人類愛へと視点が移った。しかしヒトは環境を破壊し過ぎたため、次は環境保護へと移動し、21世紀は地球意識が高まった。それでも未だ、民族主義、国家主義は非常に強固である。特に民族主義は今後も強まるだろう。軍事力を背景とした外交や深刻な宗教対立なども前世期と何ら変わることはない。しかし生命史の流れで現在そして未来をとらえれば全く異質の時代であることが理解できる。指導者としての導命家は高所大所の観点から、地球人のみならず、生命の幸福も同時に希求せねばならぬ。あなたは未来に対しても責任を負っているのだ。特に、指導的立場、決断を下す立場、教育する立場にある者、例えば富、知識、才能を有する導命家にとって、生命を導くことは誇り高い責務である。

今世紀中盤までは、組織ではなく、個々人の活動が中心となる。意識の高い人たちと志を共有し、導命有志と交流すること。知識のある者は知識を提供し、資金のある者は資金を提供する。有為の若者がいればこれを援助する。こうした互助関係を形作ることが大切である。

今世紀半ば以降は、導命家に思い切った決断が求められる。21世紀初頭の世界構造が20世紀半ばの決定によって作られた如く、今世紀半ば以降の決定は22世紀の素描となる。そして22世紀は、20世紀型の人間中心主義的な価値観から脱却していなければならない。ゆえにその決断は、ホモサピエンスの幸福という観点からは行われない。

ヒト種という特定種の幸福に絶対価値を置く考えは、結果としてヒトのみならず地球全体に不幸をもたらす事を、21世紀生まれの指導者は先祖の歴史から学ぶ。今まで当然だと考えられていた権利は制限を受け、逆に気付かれなかった存在は権利を獲得し価値を得る。それに伴ってヒト種全体が従来の生体機構を変化させ、新たな次元へと向かう。

30世紀頃には新たな社会が誕生しているだろうか。それが無理なら1万年以内に、と思う。せめて56億7千万年後までには、今よりも賢明な社会を建設しなければならない。なるべく弥勒菩薩の手を煩わせないよう精進したいものだ。

2011年3月11日の東日本大震災によって、日本は深刻な課題に直面する事となった。目下の課題は被災地の復興、放射性物質による高濃度汚染地域から日本という生命体を回復させることである。その為にも遺伝子工学、がん対策、放射線対策、ロボット開発に全力を注がねばならない。いずれは固有地震と大津波による破壊を避けるため、地球外共同体への移住も真剣に考えねばならない。

これらの課題は、21世紀初頭の技術力では困難に思えるだろう。しかし、今世紀は力不足でも、22世紀、23世紀頃には、十分な力が備わっているかもしれない。ゆえに、長期的な視野が求められる。日本人の導命家は、300年、500年、あるいは1000年、2000年の視野で全体を眺め、根気強く取り組まねばならない。あなたは、いま挙げた時間を長いと感じるかもしれないが、そもそも時間の長短とは、人間の寿命や生活感覚を基準とした主観的なものに過ぎない。人間の感覚など、時間それ自体とは何の関係もない。目的達成に要する時間が100年であろうと100億年であろうと、導命家は動ずることなく邁進するのだ。

時間に対する抗体が出来ても、結末の見えない作業に従事していれば、意義や価値の輪郭線がぼやけてしまうだろう。その場合は、未来から今の自分を見つめよう。例えば現代人が幕末や戦国時代を眺めるように、150年後または400年後から今の世界、日本、そしてあなたの振る舞いや生き方を眺めればよい。今を懸命に生きるあなたの姿が見えるだろう。そしてその姿は、21世紀を舞台とした、あなたという登場人物の物語でもあるのだ。

一万年後の人生設計

私が認識する現在とは、今から1万年後の世界を指す。従って「いわゆる現在」から1万年後までは、私にとって過去なのだ。「いわゆる現在」は1万年前の風景、ホモサピエンスは1万年前の地球で勢力を誇っていた種。私は大変感慨深く、今を眺めている。

私の現在である1万年後は具体的にどうなっているか。当然ながら、そんな事わかるわけがない。だからと言って、沈黙する必要はない。むしろ声高に唱える。何故なら、唱えたいからだ。素粒子の如き惑星の表面に棲息する1頭のホモサピエンスが1万年後の世界を声高に唱えても宇宙にとって何の問題があるのか。むしろ、その心意気たるやよし、と讃えられて然るべきである。

では、私の考える1万年後の世界はどのようなものか。私はこの著書を通して導命の種を播いた。それらはやがて萌芽し、樹木となる。導命の木々は、1万年をかけて、ゆっくりと、逞しく成長する。それは「導命のもり」となる。ここで「もり」の説明をしておこう。「もり」には、森、杜、守、鋸の意味がある。「森」は生命を育む場所として。「杜」は導命の鎮守として。「守」は導命を守る防具として。「鋸」は戦い抜くための武器として。

1万年後、導命のもりは地球を越え、太陽系、そして銀河系に広がっているだろう。そして、私の心意気に共鳴した新しい人々によって、新たに発見された銀河に私の名が冠せられるのだ

導命家

<http://p.booklog.jp/book/46270>

著者：導雲

Copyright © 2012 down All Rights Reserved

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/doumei110/profile>

著者ブログ<http://doumeika.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46270>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46270>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.